

# 有吉佐和子「紀ノ川」における性的差異

大河 晴美  
仁愛大学人間学部

Sexual differences in Sawako Ariyoshi's "Ki River"

Harumi OKAWA

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

有吉佐和子の長編「紀ノ川」には、その終末部分の原型というべき短編「死んだ家」がある。祖母—母—自分の関係を同じくモデルとしながら、父系の家の衰滅を描くに留まった「死んだ家」に対し、物語中の性的差異をいかし、父系の家は衰滅しても、女には女の絆で繋がれた家があることを描いたのが「紀ノ川」であろう。本稿では、女人高野と呼ばれた慈尊院の乳房形と紀ノ川沿いの嫁入りの言い伝えによって呼び込まれる生／死、自然／不自然という二項対立のイメージ、家紋ではない女紋の変更と継承で表明される女の意識／無意識、「真谷家の主」と呼ばれる白蛇で表象される姑—嫁関係、「死んだ家」と同じく終末部分で朗読される『増鏡』の法皇と東宮の関係の祖母と孫娘への置き換えなど、「紀ノ川」に頻出する性的差異のある事象に着目しつつ、有吉が描こうとした女の絆、女の家とはどのようなものかを考察した。

キーワード：有吉佐和子、紀ノ川、性的差異、女紋、蛇

## 1 はじめに

有吉佐和子の「紀ノ川」は、『婦人画報』昭和34年1～5月号に連載され、同年6月に中央公論社より刊行された<sup>1</sup>。前年11月号の『婦人画報』には、連載予告を兼ねた「紀ノ川紀行」が掲載されている。この旅行記で有吉は、「合計七年間の紀州ッ子」であること、祖母の危篤の報を受けて駆けつけたときのことと触れ、次のように述べている。

祖母が死んだとき、私は祖母から母へ、そして母を経て私へと流れてきているものを、私の肉体にはつきり見詰めていた。家が男系に継承された誤ちを、私は封建制度の中に認めたのである。祖父は死んだが、祖母は私の中に生きている。それこそ「家」というものだ、と私は気が付いたのだ。はなはだしく観念のないいまわしだが、私はその発見を数行の文章では表現できない。つまりこれは小説「紀ノ川」を書く動機なのだ。

祖母—母—自分の関係や病床の祖母に『増鏡』を朗読したことは、すでに随筆「伝統美への目覚め」(『新

女苑』昭和31年12月)、短篇「死んだ家」(『文学界』昭和33年5月)の題材とされていた。恩田雅和は、「人物名や細部に若干の違いはあるが、『死んだ家』は、『紀ノ川』の終末部分と全く同じで、その原型といってもよい<sup>2</sup>と述べている。関西の旧家で政治家の妻であった祖母の花代が倒れ、母の政代に代わって東京から駆けつけた孫の紀美子が、祖母に『増鏡』を朗読する「死んだ家」は、たしかに「紀ノ川」終末部分の「原型」というべき短篇である。しかし、「全く同じ」ではない。次の異同に見るように、祖母を通して紀美子と華子が受け取ろうとするものは、明らかに異なっている。

この人の血が、私にも流れていると思うと不思議だった。が、ふとそう気がつくと、紀美子は軀の中に、久瀬家の執念が、どくどくと注ぎこまれてくるのを感じた。讀んでいる増鏡に、意味を汲む余裕はなかつた。(略) 花代を通して、死んだ家に何百年生きていた人々の黝んだ生命を受取るために、やるべきことはこれだけだと紀美子は憑かれて讀み續けた。(「死んだ家」)

この人の血が、私にも流れていると思うと不思議

だった。が、ふとそう気がつくと、華子は自分の軀の中に真谷家の執念が、どくどくと音をたてて注ぎこまれるのを感じた。いや、紀本家の豊乃から、花へ、そして文緒から自分へと確かな絆が力強く繋がれて、花の胸の鼓動が直に華子の胸に響いているのを、華子はそう感じたのだ。読んでいる増鏡の意味を汲もうとする余裕は失われた。(略) 花を通して、家に生れて死んだ多くの女たちの<sup>くろ</sup>ずんだ生命を受取るために、やるべきことはこれだけだと信じて、華子は憑かれたように読み続けた。(「紀ノ川」)

紀美子が受け取とうとするのは、衰滅する旧家に生きた「人々」の生命である。いっぽう、華子が受け取とうとするのは、家を越えて繋がれた「女たち」の生命である。「紀ノ川」は、『死んだ家』を書き直し、それをふくらませて、滅びつつある家に新たに息を吹き込ませようとした<sup>3</sup>ものではなく、父系の家が衰滅しても、女には女の絆で繋がれた家があることを描こうとしたものであろう。

「紀ノ川紀行」の結びでは、終戦前後の混乱期に電車の故障で鉄橋を歩いて渡った天竜川と紀ノ川が、次のように比較されている。

天竜川を男性とするなら、紀ノ川は女性であつた。水しぶきをあげたり、滔々と音をたてて流れる勇ましい川と、紀ノ川は性を異にするのである。

紀ノ川は、静かで、そして豊満であつた。その水の力は底深く、総ての抵抗を包含してしまう。夜、月光にうねる川面を足下に見下すと、不気味なくらいであつた。静かなものほど恐ろしい。

この旅行で、夜の川を見ずにすましたのは幸運であつた。私は碧く優しい紀ノ川が好きである。その上に、私はフィクションを流して行こうと思う。

この紀ノ川のイメージの上に、有吉は、父系の家を越えて繋がれた女の絆を描こうとした。そのために、「紀ノ川」の舞台は、「死んだ家」のような漠然とした関西ではなく、有吉の母の実家があった和歌山県海草郡木ノ本村でもなく、紀ノ川上流の伊都郡九度山村と下流の海草郡でも川沿いの<sup>いさお</sup>有功村字<sup>むそた</sup>六十谷でなければ

ならなかった。そうでなければ、「紀ノ川沿いの嫁入りは、流れに逆ろうてはならんやえ」という豊乃の言葉は成り立たず、「紀ノ川」の物語も始動しないからである。

磯田光一が述べたように、「かつては桜と桃とを区別できなかった少女が、自身の属する文化を求めて、時代の失ったものを虚構の世界につむぎ出そうとした希求」<sup>4</sup>が有吉文学の根であるなら、「紀ノ川」の虚構の世界とはどのようなものか。本稿では、「紀ノ川」に頻出する性的差異のある事象に着目しつつ、その物語世界について考察したい。

## 2 慈尊院の<sup>ちちがた</sup>乳房形と紀ノ川沿いの嫁入り

「紀ノ川」は、明治32年の早春、祖母の豊乃が孫の花の手を引き、慈尊院の石段を上る場面から始まる。二人が訪れた慈尊院は、長く女人禁制であった高野山に対して、女人高野として女たちの信仰を集めた寺院である。その霊廟弥勒堂の前の柱には、「羽二重で丸く綿をくるみ、中央を乳首のように絞りあげた」「安産、授乳、育児を願う乳房の民間信仰」である乳房形が奉納されている。花は、「まっ白な新しいものが二つ三つある他は、どれも風雨にうたれて古び黴んでいた」乳房形に目を奪われ、自分も近く奉納するだろうと考える。

ここに乳房形が登場するのは、「結婚の意義と女の役目の一つは子を産み家系を保つことにある」と信じる花を語るためだけではない。「紀本家を永遠に離れて、豊乃とは一つ墓に入るのなくなった花が、家の絆を離れて女で祖母と結びあつた」と語ることで、女の絆／家の絆の差異を示し、乳房形／家の墓という事物を通して、生／死のイメージを呼び込むためである。

この後、乳房形を奉納する場面は、花の長男政一郎と長女文緒、文緒の長男和彦と長女華子の誕生前の計4度ある。奉納された子は無事に育つが、花が奉納を怠った文緒の次男晋は、昭和3年に赴任先の上海で生まれ、1歳で病死する。乳房形の生のイメージは、奉納されない晋の死によって保持されているのである。

同様のことは、2件同時に起こった花の縁談について、紀本家の当主である息子信貴の意見を退けた豊乃の言葉にもある。

「なんでて考えておみ。紀ノ川は東から西へ流れてるわの。紀本から隅田<sup>すだ</sup>へ行たら西から東で流れに逆らうちゅうもんや。紀ノ川沿いの嫁入りは、流れに逆ろうてはならんやえ。花は隅田はんにやりまへん」

「花は真谷へ嫁にやるんよし」と言う豊乃に、信貴が家格を理由に反対すると、文政5年に一人娘に生まれで婿を取り、「明治維新」が口癖の豊乃は、「家柄やの家格やのは大黒柱の男あつてのことやしてよし」と言う。24歳で有功村の村長となった真谷敬策の実績と将来性を言われ、自身も九度山村の村長である信貴には一言もない。ならば、その前の言い伝えめいた言葉はなぜ必要だったのか。のちに、その豊乃の言葉を花に強く思い起こさせる出来事が2度起こる。

1度目は、花が嫁いだ翌年、真谷の分家である半田から岩出に嫁入りしたばかりの娘が、降り続く雨で氾濫した紀ノ川に吞まれて死ぬことである。そのとき政一郎を産んだばかりの花は、「言い伝えや迷信の類をあまり好まぬ」敬策に豊乃の言葉を伝えなかったことを悔やみ、静かで優しい／荒れて恐ろしい紀ノ川を思いながら、「透<sup>たゆた</sup>巡うのが婦徳かどうかという疑い」を持つ。和歌山高等女学校で『女大学』を学び、「ただ優雅に美しく、夫の言葉には肯くことよりしなかった花」が、政一郎をあやし過ぎる夫を毅然と制し、県会議員進出に奮い立たせるのはそれからである。また、「豊かな紀ノ川を、豊かに使わんで、水が怒ると違いますかのし」と述べ、敬策の治水政策の原拠ともなる。

2度目は、昭和2年に大和の旧家に嫁入りした次女和美が、1年半後に風邪をこじらせ、肺炎を併発して死ぬことである。ここでは、冒頭で示された家の絆／女の絆が、和美の骨壺は楠見家の墓に入り、生まれ育った真谷家には「実の母親が、ぬけがらのような嫁入道具を貰って帰るばかり」という形で現れる。紀ノ川沿いの嫁入りについての流れに沿う／流れに逆らうとい

う豊乃の言葉も、生／死のイメージを呼び込むために置かれているのである。

晋と和美の危篤の報は、前年の選挙で県会議長から衆議院議員に転じた敬策の在京中、ほぼ同時に花のもとに届き、二人は相次いで死去した。翌年、3度目の妊娠をした文緒は日本での出産を希望し、和彦を連れて帰郷する。文緒が晋を死なせた苦しさを打ち明けると、花は豊乃の言葉を伝え、「そんな迷信をかもうたら悪い」と和美を大和に嫁がせ、和彦のときは自分が乳房形を奉納したが、晋のときは代わりの人もやらなかったと悔やむ。その後、これまで民間信仰を迷信と断じてきた文緒も、自ら作った乳房形を奉納し、「こいだけ気が楽になるんやよって迷信も捨てたもんやないと思いましたわ」と笑う。和歌山高等女学校から東京女子大学までの在学中も、晴海英二と結婚してからも、花に反発し続けた文緒が、ともに子を亡くした母として歩み寄る場面は、乳房形と紀ノ川沿いの嫁入りの言い伝えで示された生／死のイメージが重なる場面でもある。

紀ノ川沿いの嫁入りについて、豊乃は、「みんな流れに沿うて来たんや。自然に逆らうのは何よりいかんこっちゃ」とも言った。昭和18年に東京から華子と昭彦を疎開させにきた文緒の言葉が、それと響きあっていることは言うまでもない。大阪の妹歌絵の子たちも来ているのを知った文緒は、「お母さん、家というのは何やるねえ」と問い、紀本の兄と弟、晴海の義兄が妻の実家や親戚を頼っていることを挙げ、「原始社会の母系家族は自然やったんやと思いませんか。いざとなって頼るのは、男の家やのうて、女の実家方ですよ」と言う。ここでは、冒頭から示されてきた女の絆／家の絆が、民間信仰や言い伝えのレベルではなく、現実のレベルで自然／不自然であることが示されている。

翻って花が嫁ぐ日、人力車で列をなす嫁入りも珍しくない頃に、青磁色に揺らめく紀ノ川に5艘の舟を浮かべ、花嫁は塗駕籠の中にいるという「時代がかった嫁入り」を演出し、川岸で見送った豊乃は、途中の休息所にも「北岸の旧家名家ばかり」を選んでいて。それは、花の縁談では珍しく豊乃に楯突いた信貴が、「川向うへ嫁入らせるのも水で縁切るちゅうて悪いて

云いますやろ」と言ったとき、『万葉集』を引き合いに、「いうたら紀ノ川の此方が女で彼方が男や」「妹山のある岸から背山へ嫁げば、なな障りがあるもんで、え」と言い込めたことによる。しかし、北岸の背山がある笠田では、花が「此処から見えますかのし」と尋ねた笠田本家の御っさんでさえ、そのありかや妹背山のことを知らない。

紀本豊乃の名は、紀ノ川の豊かさ<sup>5</sup>を思わせる。その上流が吉野川と呼ばれるように、豊乃の母は吉野から来たという。花の嫁入りに始まる物語は、豊乃が伝えた生／死、自然／不自然、女／男という二項対立のイメージによって、過去に通じ、未来へ流れていくのである。

### 3 姫蔦の女紋

「紀ノ川」には、家紋／女紋が多く登場する。嫁入り道中の花は、「嫁しては子を儲けて一家の繁栄をはかるという女の心得を示すもの」として、男児の市松人形を抱いている。人形の羽織の紋は、真谷家の横木瓜の家紋である。日暮れには、紀本家の三巴の紋提灯が5艘の舟を飾り、六十谷で出迎える大勢の手にも木瓜の紋提灯が躍っている。三々九度を交わし、披露宴が進むなか、花は箸もつけていない膳の上の木瓜紋を見つめ、「家に紋があるという習慣」を考える。花嫁衣裳の打掛裏には、真谷家の女紋である三ツ割木瓜が染め抜かれている。それは、豊乃が「不細工な紋じよの」と溜息をついたように、「どう小さく染めさせても、女の着物にはなじみにくい紋」であった。

のちに、花は自分の紋を姫蔦に替え、文緒の花嫁衣裳も姫蔦の紋で整える。変更され、継承される姫蔦の紋は、何を表しているのか。

まず、花が自分の紋を替えるまでの経緯を見ていきたい。

花が嫁した真谷家では、明治33年に政一郎が誕生し、35年に舅の太兵衛が病没した。敬策は名実ともに当主となり、花も御っさんと呼ばれるようになる。六十谷で御っさんと呼ばれるのは、真谷家の当主の妻以外にない。日露戦争が起こった明治37年には、前

年に分家することが決まった義弟の浩策が真谷新家を立て、九度山の豊乃が死去、文緒が誕生した。前年の秋、乳房形を奉納するために里帰りした花は、紀本家を出てからの歳月を数え、「もう自分は完全に真谷の家の者になっている」と思う。しかし、浩策に山を全部やると決めた敬策から「あいつ、お前に惚れとったよってなあ」と聞いて以来、浩策のひねくれた態度と思い合わせ、女学校時代に覚えたプラトニック・ラブという言葉でその思慕を想像しては、婦徳に悖ると自責し、羞恥していたのである。

その後、幼い政一郎から「叔父やんところに、小母んいてたでえ」と聞くまで、花はウメの存在を知らなかった。新宅見舞に行った花は、「市から来なした女中さん」を確認するが、翌年正月にウメと浩策の関係を確信する。夏にはウメの妊娠に気づき、「分家のふしだら」を知って取り乱す敬策に、「ウメを正式に迎えておあげなしたらと私は考えますけどのし」ととりなす。敬策は、夫・浩策・ウメの三方無事を思う知恵と感じ入るが、花の逞しい自尊心は嫉妬からウメを遠ざけることをとがめ、ウメの婚礼仕度を「まるで母親のように」楽しみ、浩策にも「まるで姉以上の親しさ」を持つことで救われようとする。ところが、浩策は以前にまして花に反発し、法事以外の交際をなくした本家と新家は、文緒によってわずかに交流するのみとなる。

花が浩策を思慕した一時期は、「生身の女の素顔を照らし出したようにも思われる」<sup>6</sup>、「内面心理によって屈折してゆかない小説作法」で「早々に事態を収束」<sup>7</sup>していると指摘される部分である。しかし、花が自分の紋を姫蔦に替えるのは、この婚礼支度の最中なのである。きっかけは、ウメの着物を染めに出すとき、真谷家の女紋である三ツ割木瓜が気に入らず、豊乃が紀本家の三巴を嫌って自分の紋を姫蔦にしていたのを思い出したことであった。

蔦は、幹にからんで伸びるものとして、もともと女の性を現わす植物であった。独断で替えても悪いことではなかろうと思った。豊乃が何から思いついて姫蔦を使うようになったか、そこまで考えることはできなかったが、豊乃の母親の実家が鬼蔦の家紋として、女紋は姫蔦にしていたものかもしれないし、

またその母親が、嫁入先の紋を女に使いかねて考案したかとも、探れば幾らでも遠い昔を想像することができる。

こう考えた花は、浩策が難癖をつけることを案じてウメの紋服は三ツ割木瓜にするが、自分の紋付はすべて独断で姫蔦に改めてしまう。近藤雅紀によれば、女性が使用する紋には次のような種別がある。

- 一 正紋 家長を象徴する紋章、いわゆる「家紋」である。男女の別はない。
- 二 副紋 正紋とは別に定めた女性用の紋章。「紋替」などといわれるものである。
- 三 父系紋 女性の生家の正紋。いわゆる「里の紋」は、父系紋をさすことが多い。
- 四 母系紋 女性の母方に遡行する紋章。右の「里の紋」と混同されやすい。
- 五 私紋 個人的嗜好・動機により選択・案出した紋章。<sup>8</sup>

真谷家の女紋である三ツ割木瓜は副紋である。早く逝った嫁の水尾に代わって花を育てた豊乃の姫蔦は、花にも何に由来するものかわからない。豊乃の母方に遡行する紋であったとしても、豊乃は父方の祖母であり、花にとっては母系紋ではなく私紋である。

では、花の選択における「個人的嗜好・動機」とは何か。挙げられているのは、蔦が「幹からんで伸びるもの」として「女の性」を表すこと、紀本本家に嫁いだ豊乃の母、そのまた母と「遠い昔」の女たちを想像できることである。真谷本家に嫁いだ花にとって、その「蔦」が絡むべき「幹」は、敬策であって浩策ではない。姑ヤスや新婦ウメと同じ三ツ割木瓜ではなく、花だけが姫蔦の紋でその婚礼に臨むのは、浩策への思慕やウメへの嫉妬を抑え、よりいっそう敬策という「幹」に絡もうとした花の意識／無意識の表明ではないか。

のちに、その花を「紀ノ川」に喩えるのは浩策である。大学進学を控える文緒が新家を訪ね、母と不仲になった理由を尋ねたとき、浩策は「生命力というもん知ってるか」と前置きし、次のように答えている。

「お前<sup>ま</sup>はんのお母さんは、それやな。云うてみれば紀ノ川や。悠々と流れよって、見かけは静かで優しゅうて、色も青うて美しい。やけど、水流に添う弱い川は全部自分に包含する<sup>ま</sup>気や。そのかわり見込みのある強い川には、全体で流れこむ気魄がある。昔、紀ノ川は今の河口よりずっと北にある木ノ本あたりへ流れとったんやで。それが南へ流れる勢いのいい川があって、紀ノ川はそこへ全力を注いだんで、流れそのものが方向<sup>む</sup>を変えてしまうたんや」

浩策は、花という「紀ノ川」が、敬策という「見込みのある強い川」に全力を注ぎ、自分とウメを「生命力のない弱い川」とみなして包含しようとしたことが理由だと言う。

その浩策も、昭和14年に敬策が急死し、夫の政治活動のために転居していた和歌山市の邸を始末して花が六十谷に引き上げると、しばしば訪ねてくるようになる。そこにあるのが、「かつて浩策に心が仄かに吸い寄せられたこと」を思い出した花が、「もし自分がこの退嬰的な男の妻になっていたらどうだったろうか」と想像し、「浩策の妻になって、完全に一人だけの女として守られてきたウメには、しかし花のように豊かな女の満足を味わうことはなかったのだ」と自己肯定する場面である。やはり「夫の死後にふと浮かんだ妄想として簡単に退ける」<sup>9</sup>と指摘される部分であるが、この場面でも、「蔦」のように「幹」に絡んで伸び、「紀ノ川」のように「見込みのある強い川」に全力を注いだ花を通して、「蔦」が「紀ノ川」のアナロジーであることが示されている。

次に姫蔦の紋が登場するのは、文緒の婚礼の際である。晴海家の家紋は亀甲の中に並び矢であり、英二の母は裏梅を使っていた。紋帳を確認すると、並び矢と裏梅には関連がない。「晴海家の母系に裏梅を家紋とする家から嫁した女がいたのだろうか」と考えると、花は文緒の紋付を勝手に姫蔦で整えてしまう。

長男にやるわけでなし、次男と結婚すれば当然分家することになるから女紋にまで姑もうるさい干渉はしないだろうと思ったのだ。文緒のように独立自尊

の精神が強い娘を嫁がせるについて、せめて姫蕙のように女らしく男に頼る心を持たせたいという希いが、花の意識下に働いていたのかもしれない。あるいはまた、花の存在をないがしろにして運ばれた縁組に対して、無意識の裡に花が不満を表明していたのかもしれない。

花が自分の紋を替えたときは、すでに自らが真谷本家の当主の妻であった。ここで花は、分家の妻の女紋にまで姑も干渉しないだろうと考えている。家紋ではない女紋は、本家／分家の違いはあっても、女の領分で捉えられているのである。さらにここでは、文緒の紋を姫蕙にすることが、花の意識／無意識の表明であることが示唆されている。翻って花が自分の紋を替えたとき、その表明がなかったとはいえない。

文緒は、結婚後初めての手紙に「旧時代ノ因習ニ添ッテ揃エラレタ嫁入道具ノ多クノ無駄ヲ整理返却シタ」と書く。乱暴な荷造りで六十谷に届いた荷物を改めた花が「……文緒は石女うますめと違いますやろかのし」と言うのは、その婚礼衣装や道具類の紋が「女の性」を表していたからである。文緒を知らず、花との軋轢も知らない松井の妻が笑って打ち消したように、その心配は杞憂となる。

また、荷物の中には、紀ノ川の色と同じ「冴えた青磁色地に友禅染で様々な彩りに染め上げた蕙の葉の絵羽模様」の振袖もあったが、妻となった文緒は、「夫を冷静に観察してその能力を見極めるよりも、彼女の理想像へ彼を推進させるべきだという気魄」で、のちに英二に「花の娘」であることを思わせる。嫁入り道具は返送されても、姫蕙の紋と紀ノ川の色が表すものは、花から文緒へと伝わっていたのである。

花が身につけ信じた『女大学』の婦徳は、父系の家を存続・強化するため女に課された規範であった。しかし、姫蕙の紋を選択した花は、自分のときも文緒のときも、母系の女の存在を意識している。母に反発し続けた文緒が、戦時下の疎開の有様を見て「原始社会の母系家族は自然やったんやと思いませんか」と言うように、豊乃の姫蕙を「母系紋」のように受け継ぎ、継承しようとした花も、いっぽうでは「母系を志向」<sup>10</sup>していたと見ることができよう。

#### 4 真谷家の白蛇

蛇にまつわる民話・伝説は全国に広く分布し、和歌山にも多く存在するが<sup>11</sup>、「紀ノ川」にも蛇が登場する。

1度目は、姑ヤスが寝たきりとなって1年ほど経ったとき、六十谷の家に泊まった花によって目撃される。夜、「ふと異様な光が前蔵の一隅にある」のを見た花は、「植え込みの根を分けて這いずる青白いもの」が「太さ二寸はありそうな大きい蛇の胴」であることを認める。それは、ヤスや村人から聞いていた「真谷家の主」と呼ばれる白蛇であった。花から報告されたヤスは、「私は二度ばかり見たけどのう、長さは一間ほどあったわよう、白い蛇ちゅうな温おとな和たちし性やで悪さはせえへん。前蔵へ棲まわせても大事だんないのえ」と繰り返すようになる。見舞いに来た義姉が、「もう近いんと違ちやうやろか」と花に言い、「前蔵の蛇が姿を現わすと、必ず家の中に不幸が起るといいういつたえが真谷家にはあった」と付け加えた翌年、ヤスは死去する。

2度目は、花が脳溢血を再発して倒れ、大阪の子と孫、東京の孫の華子が六十谷の家に集まったとき、「東の前蔵から西の前蔵へ樋を伝って移る途中で、老いて命脈尽きかけたものか、ぼたりと落ちた」ところを棒で一撃される。一撃したのは、「花が久しく待望していた内孫の男児」秀雄であり、騒ぎを知って駆けつけた華子は、「前蔵の前でとぐろを巻く力もなく、悶えていた」蛇に息を呑むが、「真谷家の前蔵にまつわる伝説を知らない孫たち」は、その息絶えようとする姿を平気で見守る。

1度目の蛇がヤスの死の予兆なら、2度目の蛇は花の死の予兆であろう。また、1度目に生きて目撃された蛇が、2度目には瀕死で目撃されるのは、ヤスの次には存在した真谷家の御っさんが、花の次には存在しないことを示している。しかし、その継承と断絶に、吉野裕子の論<sup>12</sup>をもとに仲玲子が述べる「女性のみものとして行われる」「生命の更新」<sup>13</sup>を見ることはできない。「真谷家の主」は、当主であった太兵衛や敬策の死の前には現れず、それぞれが目撃された際の動きから、真谷家の御っさんと呼ばれた女を表象するものである。その姑－嫁関係の継承は、吉野のいう蛇の脱皮＝女の出産によるものではなく、母－娘関係

の継承になぞらえることはできない。

また、秀雄が蛇を殴るのも、「男児には『蛇』および『家』など関係ない」<sup>14</sup>からではない。「真谷家の主」の伝説を知らない孫たちには、蛇は蛇でしかなかったからである。3年前に花が倒れたときに駆けつけた文緒は、子がない兄の政一郎が妻を亡くし、大阪の銀行を辞めて六十谷に戻り、何をすることもなく生きているのを「なんや旧家の亡霊を見てるような気がしたわ」と言い捨てた。時代とともに旧家は衰退し、伝説は途絶え、蛇も息絶えようとしている。内孫で唯一の男児である秀雄の一撃は、もはや真谷家が継がれるべき旧家ではなく、その御っさんも花で最後となることを図らずも示しているのである。

吉野は、古代日本人の蛇信仰が、表層からは隠されながらも現代まで続いているという。蛇はその外観や生態から男／女の性と関連づけられ、女の性との関連を復元すると、次のようではなかったかと述べている。

脱皮に似た現象を人に求めれば、それは女性における妊娠・出産である。女は自身の中に新しい生命を宿すことが出来、その宿らされた生命は時が来れば母の胎というカラを破って外に出る。(略)カニや蛇の脱皮とは単位を異にする脱皮が、女を通してのみ連続としてつづくのである。(略)古代人によって出産が脱皮になぞらえられているからこそ出産する豊玉姫は蛇体を取り、蛇はその脱皮する生態をもつ故に女祖先神の性格を帯びるものともなる。<sup>15</sup>

「真谷家の主」は、真谷家の御っさんを表象し、その継承は脱皮＝出産にはよらないが、いっぽうでは、ヤスも花も出産した「蛇」であり、その外見や行動に蛇を思わせるところがある。

晩年、眼を患ったヤスは、「お父さんが呼んでなさるのかもしれない」と自ら死期を口に。「白い眼やに」が出て「赤く色づいて」いるヤスの眼は、「真谷家の主」の「白兔のように赤い眼」を想起させる。ヤスに鉄漿つけをすることで、「生命萎えて行く老人に力を与える喜び」を感じる花は、手入れの行き届いた黒い歯に「強烈な生命力が凝結している」のを見る。吉野によれば、人の誕生とは蛇から人間への変身、人の死

とは人間から蛇への変身と位置づけられ、鉄漿つけは元来「その金気で蛇を下ろす呪術」<sup>16</sup>であった。「台所で、火鉢を脇に、花が熱心にヤスの歯に鉄漿をつけているところは、文緒には家と女の戯画に思えた」という姿は、ヤスを蛇への変身＝死から遠ざけようとしたものと見ることもできよう。

また、「蛇は鶏の卵が好きで呑みに来る」<sup>17</sup>という。「紀ノ川」には、日頃優雅な姿を崩さない花が、秘かにかんざしで殻を突き、生卵を呑む場面が2度ある。

1度目は、独身の浩策の新家に女中がいると聞き、新宅見舞に出かけたときである。留守ならば中で待とうと上がり框に腰掛けた花は、体が弱い浩策の滋養のために持参したうちの一つを呑む。それは「卵白の粘りけが黄身の濃い味を包んで、喉を通るときには快感」を花にもたすが、背後に視線を感じた花は呑み終えた卵の殻をとっさに袂に隠す。浩策も帰宅し、用事を済ませた花は、帰り道の水の涸れた小川に殻を捨てるが、そのとき感じた切なさは、「あられもなく生卵を呑んだところをウメに見られたという羞恥心だったろうか」と語られる。

2度目は、戦後、本家とは逆に裕福になった新家の浩策が、十数冊の雑誌とともに持参したときである。花は「老人は老人同士で労りあおうとする浩策の気持ち」と受け取り、浩策が帰った後、二つ立て続けに呑む。「喉を通るとき浩策のいったカロリーというものが花の生命の中にしみ通る気がした」が、夕食を揃えた女中の市には「生卵を、はしたなく呑んだとはいえなかった」とある。

花が生卵を呑むことを隠そうとするのは、どちらも浩策にかかわる場面である。1度目は浩策を思慕した時期のものであり、「生卵を呑んだところをウメに見られたという羞恥心」は、浩策とウメの暮らしを見た切なさを覆い隠すものとなっている。2度目は、浩策を嫌う市によって、「いやらし。男やもめが卵運んできて、一人暮しの女おなごに滋養つけるやなんどいうたりして」と露骨に性的差異と結びつけられる。言った市も言われた花も、運ばれた卵に生殖を連想し、花は「背中に悪寒が走り、胃は凝縮して最前呑んだ生卵まで食道へ突き戻しそう」になる。リュス・イリガライは、「性的差異は人類という種の保存に必要である。それはこ

の差異が生殖の場であるからだけでなく、生命の再生の場でもあるからだ<sup>18</sup>と述べている。すでに「生殖の場」とはなりえない花と浩策にも、「生命の再生の場」として機能する性的差異はある。しかし、自分たちを「老人同士」とする花の婦徳は、そこに性的差異を見ようとしないのである。

吉野は、日本人の蛇信仰には「なんらかの意味で相似のもの」を蛇に見立てる特色があるとして、「自然物では樹木、山岳、川、道、風など、人為のものでは、家屋」を挙げている<sup>19</sup>。「蔓植物類」や川は蛇行する蛇の、家屋はとぐろを巻く蛇の見立てである。「紀ノ川」と「葛」、晩年にはとぐろを巻く力もない「蛇」で表象された花は、まさに吉野のいう「蛇」のように、文緒を産み、文緒は華子を産んだ。近代日本の「蛇」である花は、老いて命脈尽きようとしているが、その豊かな一生のうちには婦徳に倅ると抑え、隠そうとしたものもあった。その隠し方においても、「蛇」のようであったといえないだろうか。

## 5 『増鏡』

昭和6年に和歌山市の病院で生まれた華子は、もの心づくつと父英二の赴任先であるバタビヤ（現在のジャカルタ）に伴われ、小学校3年生になっても「桜の花と桃の花の識別もできぬ少女」に育つ。花は6年ぶりに会った華子を「自分の手で豊かに育ててみたいものだ」と思うが、文緒は出産のため華子を連れて帰国しており、急逝した敬策の葬儀も終わると、またバタビヤに戻ってしまう。その後、昭和16年に英二が東京に転任し、花が次男友一の結婚式のために上京したとき、国民学校6年生の華子は父母が収集したソアンコロの古壺を指で弾き、「おばあさま、昔も人間が生きていたのねえ」と言う。

戦後、華子が祖母に送った手紙にも、「昔も人間が生きていたように、これから人間が生きることも、いいことなのだと思えてきて、今は苦しい生活ですが明日を見て生きようという気になれて……」とある。東京女子大学に通う華子は、この頃よく思い出すという「隔世遺伝」という言葉を挙げ、研究中に発見したT・S・エリオットの「我々は伝統という言葉を否定的な

意味でしか使うことができない」という考え方から会得するものがあつたと書く。「前のものを否定し、つぎのものがまたそれを否定するという形でのみ伝えられる」というその理解は、花が倒れる終末部分の伏線として、「おばあさまからママへ、ママから私へ、やっぱり『家』の心は流れているのだなあ」と思い、「いつの日か華子が人の妻となって産んだ女の子」を想像するきっかけとなっている。

その終末部分では、出版社に勤める27歳の華子が、病床の花の饒舌を抑えるため、花が倒れる前に読んでいた『増鏡』を朗読する。読み始めるのは「第一おどろのした」からであり、老尼が語った「昔物語」<sup>20</sup>であるとした「序」は省かれている。読み疲れて休憩すると、花は華子を文緒と思い込み、真谷家の衰退や文緒への思いを語り出す。読み始める前にも、「日清戦争や日露戦争の国内事情から、第一次世界大戦の模様まで具に聞いた」華子には、花こそ「昔物語」の語り手であり、省かれた「序」の老尼と聞き手の関係が花と華子の関係に置換されているのは、仲玲子<sup>21</sup>が指摘したとおりである。

続いて花の指示で読まれる「第十四春のわかれ」には、老いて病床にある後宇多法皇が登場する。朗読箇所引用は、孫の東宮邦良親王が行啓する前までであり、法皇が東宮に大覚寺統の皇統の嫡流による統一を託して逝く部分は省かれている<sup>22</sup>。この省かれた法皇と東宮の関係も、やはり花と華子の関係に置換されている。ただし、『増鏡』は祖父と嫡孫の、「紀ノ川」は祖母と外孫の関係であり、花が華子に託すのは「真谷家の執念」ではない。「この人の血が、私にも流れている」と思った華子は、初めに感じた「真谷家の執念」を打ち消し、「紀本家の豊乃から、花へ、そして文緒から自分へと確かな絆が力強く繋がれて、花の胸の鼓動が直に華子の胸に響いている」のを感じると、「花を通して、家に生れて死んだ多くの女たちの勤ずんだ生命」を受け取ろうとする。かつて花は、姫鳥の女紋を通して、早く逝った母に代わって自分を育てた豊乃の母系の女たちを想像した。その花を通して、自分に繋がる「遠い昔」の女たちの生命を受け取るために、華子は『増鏡』を読み続けるのである。

冒頭から示されてきた女の絆／家の絆が、女の絆／



男の絆ではないのは、家が父系に継承されたためである。大学時代の手紙で、祖母—母—自分に伝わるものを『家』の心」と書き、母系の生命を継承しようとする華子にとっては、その女たちが生きた家こそ「家」と呼ぶべきものであろう。『増鏡』では、法皇の死後まもなく東宮も亡くなり、大覚寺統の皇統の嫡流による統一は果たされない。しかし、「紀ノ川」では、「明日を見て生きよう」とする華子によって、女の絆と「家」の絆は一つとなる。法皇と東宮／花と華子という性的差異がある『増鏡』が「紀ノ川」に登場する理由は、この点にこそ求められよう。

「紀ノ川」には、この後、「隔世遺伝」の花と華子における性的差異の捉え方の違いを示す場面がある。政一郎の「頼もしい男の肉体が、衰滅する家の中で、抵抗も示さずに萎えている」のを見た華子は、それを「揺さぶってやりたい衝動」に駆られ、「挑発的な装」に着替えて散歩に連れ出す。先の手紙で、「華子はママのように『家』というものには反撥を感じません。ママが反撥したおかげで、『家』は華子の頭の上に決してのしかかってくる心配がありませんから」と書いた華子は、その父系の家の継承者である政一郎の生命を性的差異で揺さぶろうとするのである。しかし、「もうこの年齢では来手もなし、や」と再婚の意思もなく、華子が腕に手をかけても、鼻にかかった声で話しかけても反応しない58歳の政一郎は、背後で放尿の音を聞かせるだけである。散歩から戻ると、「真谷家の主」が2度目の出現をしているが、その伝説を知らない華子は、もはや「生殖の場」も「生命の再生の場」<sup>23</sup>も持たないだろう政一郎に真谷家の衰滅を認め、文緒と交替して帰途につく。

ここで、はじめに触れた「死んだ家」との異同を見ておきたい。『増鏡』の省略部分に登場する老尼と聞き手、法皇と東宮の関係は、「死んだ家」の花代と紀美子の関係にも置換されている。しかし、法皇と東宮／花代と紀美子という性的差異はいかされず、「この人の血が、私にも流れている」と思った紀美子は、「久瀬家の執念」を感じたまま、花代を通して「死んだ家に何百年生きていた人々の黝んだ生命」を受け取ろうとするのである。

伯父の禎輔は、「紀ノ川」の政一郎と同様に「衰滅

する家の中で、抵抗もせずに萎えようとして」おり、母の政代は見舞いに来ようとせず、集まった叔母や叔父は財産の話題に明け暮れている。紀美子も華子と同様に禎輔を散歩に連れ出すが、その場面は『増鏡』を朗読する前にあり、やはり禎輔に久瀬家の衰滅を認めた紀美子が、他に継承する者のない「久瀬家の執念」を感じる前提となる。しかし、「東京で現代を呼吸している身」で「舊家というもの」が物珍しい外孫の紀美子に、「死んだ家に何百年生きていた人々の黝んだ生命」が継承できるのかは不明なまま、この短篇は紀美子が『増鏡』を読み続ける場面で終わる。

つまるところ、旧家の衰滅を描くに留まった「死んだ家」は、どの短編集にも収録されず、「紀ノ川」に包含された。包含した「紀ノ川」は、『増鏡』の登場人物との性的差異や伯父と姪の性的差異をいかすことで、「死んだ家」のエピソードを再生し、父系の家は衰滅しても、女の絆で繋がれた「家」があることを示したのである。

## 6 おわりに

真谷家を出て六十谷橋を渡った華子は、相変わらず豊かな紀ノ川の水音を聞き、疎開中の空襲で燃え落ちて再建されたばかりの和歌山城を目指す。62歳の花に連れられてきた9歳のときとは違う鉄筋コンクリートの天守閣に登り、以前はなかった望遠鏡で「川上から、川下へ」と眺めると、「紀ノ川が、まるで流れているとは思えぬほど静かに平面的に、翡翠と青磁を練りあわせたような深い色をして横たわっている」。しかし、河口の北部には大阪資本による大工場が建ち並んでおり、景観を損なわれて望遠鏡から目を離すと、遠くなった煙突の林の向こうに海が見える。紀ノ川に喩えられた花と女の絆の物語は、その継承者である華子が、「芒洋として謎ありげな海」を眺める場面で終わる。

「川上から、川下へ」とは、九度山の紀本家で生まれ、六十谷の真谷家で死ぬ花の生命の軌跡と同じであり、過去から現在までの時の流れである、その川が流れ込む海とは、川より先の未来であり、花を通して多くの女たちの生命を受け取った華子を表している。

有吉が花のモデルとした祖母・木本ミヨノは、昭和30年、有吉が24歳のときに亡くなった。「死んだ家」の紀美子が花代を見舞うのは24歳のとき、華子が花を見舞うのは昭和33年の27歳のときである。「紀ノ川」に3年のずれがあるのは、「死んだ家」には登場しない和歌山城<sup>24</sup>が昭和33年10月に再建されたためであろう。

その天守閣は、華子が花と初めて登ったときは、「戦に備えた天守閣には城館の情緒はどこにもない。あちこちの太い木組が薄暗い大天守の中に無骨一方である」と語られた。また、空襲で燃え落ちたときは、「父系による『家』の大黒柱が時代の風にゆさゆさと揺すぶられていたとしても」「泰然と座敷におるべき人」である花の膝を土の上につかせた。再建された天守閣が華子の目に「ひどく真新しく白っぽく」映るのは、それがもはや父系の家の象徴ではなく、かつての伝統や精神の名残を「硝子ケースの中」に並べた観光施設に過ぎないからである。

また、河口の北部に建ち並ぶ工場とは、小林護「和歌山の近代産業」によれば次のようであった。

住友金属は昭和一五年（一九四〇）、国の軍需工場地方分散政策のもとに、紀ノ川河口北岸に用地を確保し、同一七年、和歌山製鉄所で鉄道用車両・爆弾・大砲などの素材を製造し始めた。同二〇年、敗戦で中断していた操業も、翌二一年には連合軍から民需への転換を条件に許可され、車両や水道・化学工場用パイプの製造を開始した。昭和三一年、和歌山製鉄所を核とする長期計画に着手し、同三六年から四四年までに五基の高炉を完成させ、粗鋼生産能力九二二万トン（年産）という銑鋼一貫工場が誕生したのである。<sup>25</sup>

「紀ノ川」には、河口北岸の住友金属が「住友化学」として登場し、「水と土をこねて固めて、和歌山を他処のものに荒らさせないといっていた真谷敬策の意図までも戦争によって断たれた結果であった」と語られる。かつて豊乃は、妹背山の話から、紀ノ川の北岸を男、南岸を女に見立てた。その河口南岸の花王石鹼<sup>26</sup>は華子の視界に入っておらず、住友金属・花王石鹼を

中心とする河口の工場群に給水する河西工業用水道の六十谷第一浄水場も、華子が渡った六十谷橋の傍に昭和33年から3年計画で着工<sup>27</sup>されているが、やはり視界には入っていない。

和歌山城や紀ノ川河口の工場群に触れることで、花の嫁入りに始まった「紀ノ川」の物語は、高度経済成長期の昭和33年の現実に触れることとなる。しかし、華子が天守閣の展望台から見た紀ノ川は、河口の工場群にもその色を変えることはなく、海に向かっていている。花を通して過去の女たちの生命を継承した27歳の華子は、バタビヤ市中を流れる川の色と比較した9歳の少女ではなく、女の絆の象徴である紀ノ川の色が変わらないわけ、変えてはならないわけを知っている。また、「茫洋として謎ありげな海」を眺める華子も、「ずっと向うがパパのいるジャバね」と言った少女ではなく、その波と陽光の差異が「見る間に色の様々を変えて見せる」ように、性的差異が新たな生命を生み、生命を再生させることを知る者として、海に臨んでいるのである。

有吉は、「紀ノ川」と並行して「新女大学」（『婦人公論』昭和34年1月～12月号）の連載を開始した。その「第一講」には、次のような開講の弁がある。

概して女性は観念より体験に生きるもので、それを生理的にも肯定する私ですが、過去の女たちが、黙々として行ってきたところのものを、男性側から押しつけられた『女大学』に惑わされず、体験以前の、つまり観念的な考え方でまとめてみるつもりです。

ここに書かれた「過去の女たち」への意識は、「紀ノ川」にも共通している。「紀ノ川」において「体験以前の、つまり観念的な考え方でまとめてみる」ことは、女に見立てた紀ノ川の上に、慈尊院の乳房形の民間信仰、紀ノ川沿いの嫁入りの言い伝え、姫薦の女紋、「真谷家の主」と呼ばれる白蛇の伝説、『増鏡』の朗読などの虚実を取り混ぜて「体験以前の」過去と繋がり、その性的差異をいかすことで、父系の歴史が忘却させてきた母系の歴史を浮上させることであつたらう。

イリガライは、「明らかにしなければならないのは、

わたしたちがもっぱら男性的な系譜の制度に従って生きているということだ、「わたしたちの人間としての成熟、私たちの文明の未来には、性別のある文化というものが欠けているのだ」<sup>28</sup>と述べた。有吉の「紀ノ川」における試みも、「一方の系譜が他方の系譜に服従すること」<sup>29</sup>のない差異の文化を求めたものとして評価できるのではないだろうか。

注

- 1 以下、「紀ノ川」の引用は、有吉佐和子選集第1巻『紀ノ川』（新潮社、1970年4月）による。
- 2 恩田雅和「和歌山—『死んだ家』」（井上謙・半田美永・宮内淳子編『有吉佐和子の世界』、翰林書房、2004年10月）。
- 3 2に同じ。
- 4 磯田光一「『紀ノ川』のゆくえ—有吉佐和子論」（磯田光一『昭和作家論集成』、新潮社、1985年6月）。
- 5 有吉佐和子「紀ノ川紀行」（『婦人画報』1958年11月）の扉の写真（葛西宗誠）には、「高野山・弘法大師廟あたりに端を発する丹生川は、九度山町で紀ノ川本流に合する。写真は合流地点。水を集めた紀ノ川は、いよいよ豊かにそして静けさを湛えている。」というキャプションが付されている。
- 6 渡辺裕子「有吉佐和子『紀ノ川』の世界」（『新大國語』1987年3月）。
- 7 杉井和子「有吉佐和子—『母性』の排除による生活への眼ざし」（『国文学解釈と鑑賞』2006年2月）。
- 8 近藤雅樹『おんな紋—血縁のフォークロア』（河出書房新社、1995年1月）57～58頁。
- 9 7に同じ。
- 10 近藤雅樹『おんな紋—血縁のフォークロア』（河出書房新社、1995年1月）173～174頁。近藤は、女紋が登場する小説として「紀ノ川」を取り上げ、「花は、無意識のうちにか、祖母の女紋を自ら選び、それをまた、娘の文緒に伝えようとした。心の奥に秘められた自我は、母系を志向していないと断言できるだろうか」と述べている。
- 11 和田寛「和歌山の民話・伝説」（安藤精一編『和歌山の研究5 方言・民俗篇』、清文堂出版株式会社、1978年5月）。
- 12 吉野裕子『蛇—日本の蛇信仰』（法政大学出版局、1979年2月）。
- 13 仲玲子「有吉佐和子『紀ノ川』考」（『国文橘』1991年3月）。
- 14 13に同じ。
- 15 吉野裕子『蛇—日本の蛇信仰』（法政大学出版局、1979年2月）221頁。
- 16 吉野裕子『日本人の死生観—蛇 転生する祖先神』（人文書院、1995年3月）61～62頁。
- 17 松谷みよ子『現代民話考9 木霊・蛇ほか』（立風書房、1994年1月）336頁。
- 18 リュス・イリガライ、浜名優美訳『差異の文化のために』（法政大学出版局、1993年3月）8頁。
- 19 吉野裕子『日本人の死生観—蛇 転生する祖先神』（人文書院、1995年3月）22頁。
- 20 井上宗雄『増鏡（上）全訳注』（講談社学術文庫、1979年11月）23頁。
- 21 13に同じ。
- 22 井上宗雄『増鏡（下）全訳注』（講談社学術文庫、1983年10月）119～166頁。
- 23 18に同じ。
- 24 和歌山市公式ウェブサイト「和歌山城の歴史」によれば、天守閣は、昭和20年7月9日の戦災により焼失され、昭和33年10月1日に再建された。[http://www.city.wakayama.wakayama.jp/menu\\_1/gyousei/wakayama\\_siro/osiro/rekisi/rekisi.html](http://www.city.wakayama.wakayama.jp/menu_1/gyousei/wakayama_siro/osiro/rekisi/rekisi.html) 2014年11月28日閲覧。
- 25 中野榮治監修『定本 紀ノ川・吉野川—母なる川 その悠久の歴史と文化』（郷土出版社、2003年）155頁。
- 26 中野榮治監修『定本 紀ノ川・吉野川—母なる川 その悠久の歴史と文化』（郷土出版社、2003年）156頁。「花王は昭和一七年、紀ノ川河口南岸に旧名の大日本油脂が、油（主にヤシ油）の高圧還元、航空機の潤滑油製造のため進出し、同一九年操業を開始した。戦後は民需に転換し、社名も同二四年に花王石鹼、同六〇年に花王と改めた」とある。

- 27 日本工業用水協会「和歌山市河東、河西工業用水道事業の紹介」[http://www.jiwa-web.jp/database/shisetu\\_gaiyo/wakayama\\_pref/wakayama\\_shi.pdf](http://www.jiwa-web.jp/database/shisetu_gaiyo/wakayama_pref/wakayama_shi.pdf)  
2014年11月28日閲覧。
- 28 リュス・イリガライ、浜名優美訳『差異の文化のために』（法政大学出版局、1993年3月）9頁。
- 29 28に同じ。